

たるは、支那を以て天下としたる昔の夢なり。現時列強の分割と比すべきにあらざる。若し夫れ支那また合して一とならんも、これは數百年を一投足とする歴史上の事なり。國際列下の策論にあらざる。好餌前に在り日本の識者はなほ朝鮮扶植の失敗を支那政策に移し、列強の嫉視を買ひて、毫も利するところなきに終らんとするか。支那分割は終に避くべからざるなり。

余は再言す、日本は斷然計を決して一要港の永久占領を決定せよ。是れ東洋平和の保障たる所以、また日本が大陸に膨張する第一歩たる所以、國利を増進し國光を顯揚するまた此の如き好機あらんや。その要港を何れの地に求むべきやは當局者必ず定見あるべし。また余輩の言を要せざるべし。臺灣附近可なり。威海衛の永久占領益々可なり。余は再言す、この篇の日本に達せざる前に於て、日艦某港に集中せりとの報に接せんことを望むや極めて切なりと。

東洋の振興を言ふ。なほ早し。況んや支那扶植をや、況んや日支同盟をや。日本をしてその銳氣を養ひ、その邦土を大にし、その軍備を充實せしめ、その國富を増加せしめ、以て他日の機を窺はしめよ。支那をして列強の分割に遇はしめ、若しくはその境土を削減せら

れ、その官吏の腐敗を一掃し、その國民をして國家的觀念を長せしめ、且つ西人の貪婪廢くなきを知らしめ、兼ねて敵愾心を惹起せしめよ。東洋の振興始めて言ふべく、支那扶植始めて談すべく、日支同盟始めて唱ふるを得ん。嗚呼支那余は爾に滿腔の同情を寄す。而して今やその兒を千丈の巖下に擠する獅母たらざるを得ざるを悲しむ。

明治三十年將に暮れんとするの夕、燈下凍筆を嚙みて、

疾病に對する思想の變遷を論ず

大阪醫學校病理學助教

陸軍三等軍醫 田中祐吉

疾病とは何んぞや Was ist Krankheit? と云ふ疑問は基督紀元前の大古より現世紀の中葉に至るまで諸學者の論難講究せし所にして甲論乙駁容易に一定の解釋を與ふる能はざりき然るに千八百五十八年獨逸の碩學ウイールヒュー Virchow 氏蹶出して非凡なる卓拔の研究

を試み無朽の大著『細胞病理』 Cellular-Pathologie を世に公にして紛々たる古來の學說を統一してより吾人は久しく醫學に於ける懷疑の燒點たりし疾病の本性に就て精明確實なる解釋説明を得るに至れり必竟十九世紀の醫學が偉大長脚の進歩發展を遂げたる所以のものは實に細胞病理發見の賜なりと言はざるべからず請ふ吾人をして古來より現今に至るまで疾病に對する思想の變遷を概述する所あらしめよ

抑も學理未開なる往古蒙昧の時代に在ては宇宙及び人性の現象は當時の神話が證明する如く神或は鬼魔の所爲と迷信せしを以て人性に苦惱を與ふる疾病の如きも神魔の憑依に歸したりき而て此の如き迷謬なる觀念は今日と雖俗間に行はれ歐洲に於ても疾病人を襲ふ die Krankheit befallt jemanden 生體病魔と闘ふ der Organismus kämpft mit dem Sichelmanne 等の俚諺は尙ほ俗民の口に噂炙せるを見る、吾國にても疾病を「かみのけ」と稱へて神靈の怒りに歸し或は鬼魔の祟りとなせるは往昔より朝野の間に信せられし所にして古俗疫神を祭りて疫病の來襲を防ぎ或は加持祈禱に由て病患を療したるは史乘に徴して明白なる事實なりとす其他未開の野蠻人は今日と雖奇怪なる迷信を抱懷し種々なる惡魔を

想像して疫病の原因となせり、シャム國の土人は病魔を「フイーポブ」Phi pob と唱へ呪咀者之を使用すれば

人體に進入して可怖疾病を起すと云ひアッシル及びアツカドの土人は人體の部位を撰んで犯す所の病魔ありと信じて頭を撰むものを Idpa 頸を撰むものを Urag 胸を撰む者を Ala 内臓を撰むものを Gigin 生命を撰むものを Nantar と云へり、錫蘭の土人は種々なる惡魔を腦裡に描出して諸般疾病の發動者と信じて蟲病の病魔を Gulhasanija 僕麻質斯痛の病魔を Wasasunija 盲目の病魔を Kansanija 腸チブスの病魔を Sanija と名けぬ而て此等の病人を治療するや種々の病魔の假面を飾りたる一室に誘ひ該假面の前に病人を坐せしめ香を燒き供物を捧げ以て種々の祈禱を行ふにあり、之を以て彼等社會の醫士は必竟祈禱者に他ならず其他古代の印度希臘に於ても僧侶は一般に醫療を負擔したりき又た古代の猶太人は夙に魔憑 Demoniae の觀念を抱き疾病を惡魔の所爲に歸しぬ而てホーマーヘロドタス等も亦此の如き迷信を有したりと云ふ

以上述べたるが如く疾病を以て病魔鬼神の所爲となす者之を稱して實體的考案 Ontologische Auffassung と云ふ此の笑ふべき考案は蒙昧の時代に於て行はれしのみ

ならず遙るかに年所を闊びしたる十六世紀時代に至り再び一二の學者の唱ふる所となりぬ即ちバラチエルズ Paracelsus 氏の如きは其自著に記して曰く疾病は邪性を有する一の異體 Fremdkörper にして身体内に進入棲息し以て諸種の害毒を興ふるものなりと是れ實に古代の迷信に髣髴たるものに非ずや、降て十九世紀の初頭に及び博物學派の泰斗として有名なるシェーンライン Schönlain 氏の如きも疾病を以て身体に棲居する一の寄生體 Parasiten となし之を植物系統に於けるが如く Classen, Familien, Species. (綱、族、種) に類別しぬ而て同氏の高弟トウウヘ Traube 氏も千八百四十九年自己の卒業論文の前提語として『疾病は寄生物なり』 Morbus esse Parasitum てふ一句を掲出したりと云ふ、然ども此の如き思想は現今に於ける進歩的醫學の眼光より見れば一の妄想たるに過ぎざるなり、蓋し近世微生物學の發達に依て多數の疾患が寄生性なる事を知得したりと雖其の寄生物たるや唯疾患を喚起せしむるの原因たるに過ぎず而て疾病自己は即ち有害性の感應影響に由て身体各個の器臟に生せる生活機能の變形に他ならずなり Wohl wissen wir, dass sehr viele Krankheiten Parasitar sind, aber nur in dem Sinne, dass Parasiten

die Krankheitsereignisse sind, die Krankheit selbst ist nichts weiter, als eine durch schädliche Einflüsse bedingte Umgestaltung der Lebensvorgänge in den einzelnen Organen 例令へばコンマバチルスは虎列拉病の原因たれども虎列拉病の本體には非ず即ち該病はバチルスが産出せる毒物の感應に依て發起せる生活現象の變態なるが如し故に今日にてはシェーンライン氏の寄生説を顧みる者なく唯過去の紀念物として之を見るに留る而已、然而て疾病の本性を學問的眼光の上より論斷し以て神爲的の謬見を一掃せしものは實に吾人が醫聖として尊重せるヒポクラテス Hippocrates 氏なりとす氏は紀元前四百六十年(即ちソクラテスに後る、こと九年)希臘のコース嶋に生れたる人にして其病理説は哲學者エンペドクレスの「宇宙萬有の根源は地水火風の四元素なり」とふ説に倣ひたる者にして人体を以て血液、粘液、黃胆液、黑胆液の四素液より成立すとなし更に生活に切要なる三主力として氣 Pneuma, 温 Wärme 生力 Innonn の体内に存するを認め疾病發生の原因を解して曰く人の健康なるは四液の配合互ひに調和を保ち、氣の循環平均し体内の温充分なるに依る然るに若し四液配合に過不及を來たし氣の循環其の序を失ふことあ

らば病茲に生じ温にして瀰る、ことあらば忽ち死を來たすに至る、而して最悪の疾患は冷粘液と熱胆汁との混合に因て生ずる者なりと是れ實に液體病理説の嚆矢にして爾後十九世紀に及び維納大學教授ロキタンスキ Rokitsansky 氏はヒ氏の説を改唱して人體の疾病は全身血液の病的變稠 Dikrasie 即ち惡液に基くものとなし諸般の疾病の本性を解釋せり之を稱して稠液論 Krausen-lehre 云々

羅馬の名醫アスクレピアデス Asklepiades 氏はヒ氏の液體病理説に反對し所謂固體病理説なる者を唱導せり氏はエビクル派の原子論を根據とし以て其學説を構成したりと曰く人身は無数の原子より成立するものにして必竟健康生活なる者は原子が正規なる形態と原子間の氣孔が正規なる廣徑を呈するに依る若し此の原子に變化を來たし且つ氣孔交互の變常を生ずれば茲に於てか始めて疾病を發生す

此の固體病理説は千七百年代に至て一變しクルレン William Cullen 氏等の神經病理説とはなりぬ其説に依れば凡て人身生活の根原は神經實質の力 Kraft にして若し其の力に變動異常を來たせば乃ち疾病を發生すと是れ實にア氏の原子を神經に改め以て生活と疾病の本

性を歸納的に説明したるものなり、然りと雖精細に考ふれば疾患の原因を單に神經のみに負擔せしめんとするは毫も根據なきの説なり、生活組織は或る場合に由りては脈管、神經なきも存立することを得べし、Den Nerven allein aber die Fähigkeit der Träger der Krankheit Zu Sein, zuzuschreiben, dafür fehlt jeder Anhalt; ein jedes lebende Gewebe kann unter Umständen für Sich, auch ohne Gefäße und Nerven bestehen. — Parls.]

此時代に當て又た力學説 Dynamismus 云々なる一種の學派出でたり此の説に據れば疾病を以て身體に活動を興ふる勢力即ち生活力 Lebenskraft の變化に歸するにあり、故に以前の液體固體病理説を物質論となせば此の力學説は明らかに勢力論なり、されど該説の妄なるは後段に於て聊か辨述せん、以上掲げ來りたる諸説を見るに其の根據頗る模糊曖昧なりヒポクラテス、アスクレピアデス氏等の病理説は必竟哲學者の抽象的概念を病理上に應用したるものにして實踐研究の成績より結論したるものにあらず、其他神經病理説の如き其の迷妄なる今日より之を見れば鏗一文の價值だも有せざるなり、是れ實に科學的研究が充分に行はれざりし結果たらずんばならず、然れど

も、實驗の必要漸く學者の認識する所となりてより、病理解剖、動物試験は遂に盛んに行はるゝに至り、從來の哲學的思想を排して一意識科學的研究に傾向したるの結果始めて幽玄なる生活現象の微を發き複雑なる病變の源を審にすることを得たり

千八百五十八年に至り獨逸の大醫ウイルヒョー氏は七年間の研究を積み始めて千古無朽の大著を世に發表し以細胞病理即ち是れなり、此の書たる洵に醫學者の寶典として吾人後進の徒が愛重措く能はざる所なりとす、此の學說に據れば疾病の本性は細胞の變化に基因するものにして細胞以外に存するに非ず、今其の大略を語らんか、曰く抑も人体の構成は幽玄錯雜端倪し易からずと雖必竟其の窮極に達すれば微細なる細胞 Zell のみ而て細胞なる者は各自榮養、繁殖、運動の機能を具ふる獨立生活物にして交互相集簇して一器臟を形成し器臟更に集て身体を構成す故に人体の根元は細胞にして生活現象も亦た細胞にあり即ち吾人の生活機能なるものは細胞の各機能作用の相頼りたる者に他ならず然らば則ち健康生活現象の變態たる疾病の根元も亦た細胞たらざるを得ず即ち疾病の發現は必竟内外二界に於ける有害性元因が細胞を侵襲するに依り之に反抗せん

が爲め細胞の機能に變動を來たして或は之を退け或は之に由て退けらるゝ所の反應的活機 Reactions process のみ故に疾病は元來生活機能の減退變稠若くは亢盛したるに過ぎざらん決して異種の者にあらざるなりされば細胞以外に生活なく又た疾病なし、醫の研究の目的は唯細胞の一點に歸着すべきのみと

是れ實に細胞病理の要領なり吾人は此說に依て始めて人体が細胞より成立する一塊なる事を明にし而て生活機轉は各細胞の機能相頼り相集りて生ずる者なる事を知り得たり然らば即ち吾人が身体も生活も、つまる所、物質と、勢力との原理原則の圏外に出づること能はず、夫れ物質と勢力とは親密の關係を有するもの所謂物なきの力なく又た力なきの物なし Keine Kraft ohne Stoff und Keine Stoff ohne Kraft. 故に又た身体なきの生活あらざるなり Keine Leben ohne Körper 而て物質の變化は勢力の變化を生ずるの理を知らば從て肉體の變化は生活の變化を來たすの理を知らむ、故に曰く病變なきの疾病なし Keine Krankheit ohne Pathologische Veränderungen. 即ち我が醫學に在ては疾病を以て細胞の集積たる肉體の變化に基因する者となすなり、故に彼の精神病の如きも必竟腦髓細胞の病的變態に他なら

すとし所謂「唯物論」を以て其の根據基礎となす、論して茲に至れば前一言したる力學說の取るに足らざる所以を解するに苦るしきまざるべし、以上略叙せる所を見れば我醫學は宗教、哲學、及び科學の三時代を經過して以て今日に至りたるものなり、而て病理解剖學發達史は本論と親密なる關係を有する者なれども一先づ茲に筆を擱き他日を期して其一班を叙述せんとす、

支那帝國と鐵道經營

在清 川 崎 紫 山

清國に於る鐵道敷設論の起りたるは、我國の維新前に在りしと雖、其實行に至ては、日清戦後の僅に其端緒を啓きたる者の如し。其進歩の遲延として、實行に勇ならずるは、驚くに堪へたりと雖、我明治廿七八年に於る日清戦争は、清國政治家の頭腦を刺激し、之をして全國貫通の大設計を畫するに至らしめたり。而して清國政府は、果して能く此鐵道の利機を利用して、統一の業を成すべき乎。將た他列強國の爲に倒ま利用

せられて、政治上の危機を招くべき乎。未だ豫言すべからずと雖、要するに支那全國に鐵道の縱横するの日は、政治的經濟的大革命の機なりと謂はざるべからず。

明治二年、我文久三年、英人サー、マクナード、ステフエンソン氏なるもの、上海香港の巨商に勸説し、上海蘇州間に鐵道を建設せんとしたることありしは、支那に於る鐵道計畫の急先鋒と謂ふべし。同六年、我慶應三年、清國政府は、歐米條約の改正を豫約するが爲めなりとて、皇帝より各地方長官に向ひ、其意見を下問せられたるときに當り、當時内閣宰相を以て、兩江を總督せる曾國藩の復奏中に、鐵道敷設は許可せらるべからずとの一節ありき。國藩の持論として、機器製造を以て國家の急務なりとせし程なれば、固より鐵道敷設の利を知らざるにはあらざるべしと雖、其之を不可とせしは、多數細民の之が爲に其業を失し、或は國家の擾亂を致さんことを憂ひたるに過ぎず。而かも、清國に於て、其德望、其勳業、一世に超出せる大政治家曾國藩の如き人物が、鐵道敷設其時機にあらざることを論せしかば、其末流政治家、保守的官吏が、之に附和して、後年に至るまで鐵道敷設に反對せしこと、決して怪むに足らず。同十三年、我明治六年、英人「ジ